

はじめに

『学ぶと教えるの現象学研究 十八』をお届けします。

本誌は、この十八号をもって創刊40周年に向けての第一歩を踏み出しました。まる30年続いた「平成」もこの春に終わり、新元号へ改まる年がその一歩というのも奇遇です。ただ、向こう10年、隔年刊行を継続できるか否か、その道のりは長く険しいものに感ぜられます。

とはいえ、今号も、前十七号「創刊30周年記念号」に迫る分量となりました。これも、実践と研究にかける各執筆者の情熱と、教育領域における現象学への強いニーズの表れに違いありません。この勢いが今後も続くことを、いやさらに増していくことを願っています。

掲載論文9本は、テーマもスタイルも現象学の活かし方もそれぞれ異なり、非常にユニークかつ先進的でありながら、「学ぶと教えるの現象学研究」という点で結びつき、絡まり合っています。それは、あたかもフレア（flare）が現象学という太陽のあらゆる面からあらゆる方向にそれぞれの大ききで噴出しながら、再び表面へと回帰する運動のようです。哲学は、教えることができず、火から火花が発散するように、一人の人間から他の人間へ飛び移り、飛び火した先で自分を養い育てる、というプラトンの比喩は有名ですが、点ぜられた燈火の色合いや燃え方はそれぞれ多種多様であるという謎を、現象学は体現しています。本誌が、そうした現象学運動の不思議と魅力をお届けできたなら、編者の冥利これに尽きます。

前号から今号までの間に、本誌とゆかりの深い好著が二冊刊行されました。年来の寄稿者である遠藤司氏と榎沢良彦氏のご労作です。この場をお借りして、簡単に紹介させていただきます。

遠藤司著『言葉への道—障害の重い人たちの事例研究集—』春風社、2017年12月刊。

帯には、「言葉を発するとは？／言葉をもって他者と対話することの源泉へ」と記されています。

榎沢良彦著『幼児教育と対話—子どもとともに生きる遊びの世界—』岩波書店、2018年12月刊。

帯には、「〈教える〉関係から〈ともに育ち合える〉関係へ／40年にわたり実践研究を重ねてきた著者が、53の事例をもとに幼児教育のあり方を検証。」と記されています。

いずれも、子どもあるいは障害の重い人びととの、多年にわたるご自身の教育実践を事例とし、相手の成長を見守り支援し、相互に変容し合うプロセスを見事に描き出しています。

本誌編集にあたり、今回も新潟大学の福田学准教授に幹事を務めていただきました。

十五号（2013年1月刊）より、執筆者の許諾を得てインターネット上でも、以下のアドレスで公開しています。

http://tabata2014.blogspot.jp/p/blog-page_1100.html

当面は上記アドレスでの公開を保持します。

次号は2021年2月の刊行予定です。

バックナンバーご希望の方は、ご希望の号数を下記までご連絡いただければ、折り返し発送させていただきます。なお、十三号と十四号は在庫なし、十七号は在庫わずかとなりました。

2019（平成31）年2月

宮城教育大学 田端 健人

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149番地

Tel./Fax：022-214-3522

E-mail：tabata-t@staff.miyakyo-u.ac.jp